様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：４１１０３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２１５９

研究課題名（和文）弘前藩における「音」文化の成立及び「楽」思想の形成と近代への展開

研究課題名（英文）A Research Study on the History of Music-Culture in the Tsugaru Region of Japan from the Edo Era to the Meiji Era: Focusing on how Musical Thought Developed in the Samurai Class

研究代表者
北原　かな子（KITAHARA, Kanako）

青森中央短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：８０４０５９４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円、（間接経費）　　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世の津軽地方において、音楽がどう人々の生活に関わったかを明らかにし、近代以降の日本文化への影響を考察するものである。その第一歩として、本研究期間においては弘前市立弘前図書館所蔵資料を中心とした関連資料の悉皆調査および発掘を行い、藩校稽古館蔵書目録中の和算関係資料など、表面的には「音楽」とでてこない資料も含めて、奏楽関係資料を多数収集した。これらは音楽に関わる活動を包括的に描く上で示唆に富む成果である。また近代以降についても旧弘前藩士族の活動記録を発掘し、今後の展開の基礎を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：This research's goal is to clarify the relationship between people and music in the early modern era of the Tsugaru region and it's influence on Japanese culture. For the first step, we conducted a complete survey of related documents and uncovered a lot of useful documents. With in these documents there were documents related to Japanese mathematics from the catalog of the Hirosaki-Han school library, including documents that don't have "Music" written on the front. Additionally, we discovered the records of former Hirosaki domain's samurai families' relation to the modern era of Japanese contemporary music. These records comprehensively depict the achievements of the local people's music activity and from here we can build a foundation of its development.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：邦楽　洋楽　音楽　弘前藩　楽思想　地域研究　地方文化

１．研究開始当初の背景

津軽地方弘前は、独特の音楽文化を育んだ土地である。藩政期に江戸から伝わった生田流箏曲や普化尺八の根笹派は、それぞれ「津軽郁田流箏曲」、「根笹派錦風流」として独自の発展をとげた。また藩の用人を務めた楠美家の人々は九代寧親の命により平家琵琶相伝となり、近代に入っても、邦楽の伝統を守る一方で、西洋音楽中心の東京音楽学校（東京芸術大学前身校）への邦楽調査掛設置に尽力するなど、近代日本の音楽文化にも少なからぬ影響を持った。

庶民の生活においても芸能者集団の活動などで音の文化が育まれ、そうした中から、現代の津軽三味線が生まれている。周知の通り、国内で一つの地方の名前を冠した三味線音楽はほとんどなく、この点からも、津軽地方弘前がきわめて興味深い土地であることが窺える。

研究代表者の北原は、近代の津軽地方における西洋文化受容の研究に取り組む一方で、その一環として津軽の洋楽史に関心を持ち、これまであまり知られていなかった、楠美家が近代日本の音楽文化に与えた影響について、注目するようになった。分担者の浪川は近世弘前藩研究を専門とし、特に近年、芸能者集団など庶民生活の研究を積み重ねる中で、藩政期の庶民における音の持つ意味に着目していた。また同じく分担者の武内は、近世期の歌舞伎音楽や礼楽思想の展開など、音楽文化史、音楽思想史を専門としており、幕府を含めた武士階級の「楽」思想の展開の研究から、弘前藩での状況に関心を持った。研究分担者の山下は、東北地方におけるハリストス正教会の受容を研究しており、布教過程での音楽の効果に着目した。

本研究の全体構想はこうした研究経歴をもつ申請者間のディスカッションから構想されたものであり、社会体制が近世から近代へとかわる中で、さまざまな社会階層において音や音楽がどう関わったか、長期的展望にたって考察することを目的として、全体構造の立案を志した。津軽地方をそのケーススタディとしたのは、申請者らがこれまで研究対象としてきた経緯による。

２．研究の目的

上述のことから、本研究の最終目的は、弘前藩における音楽の状況を「音」文化と「楽」思想と捉え、その成立形成過程を明らかにすると共に、近代以降の日本文化への影響を考察しようとすることである。

ただし、この場合問題となるのは、音の性質上、実践された音や音楽がそのままでは残らないということである。楽譜はそれを補う形で存在するものの、それだけでは人々と音との関わりの全容を描くことにはならない。そこで申請者らは、萌芽研究計画として、楽譜などのように具体的な音楽を示す資料だけではなく、弘前藩の公式記録である藩庁日記を含めたさまざまな文字資料を精査することで、音に関わる行動を描き出すことを具体的な目標とした。それは、以下の４点である。

①弘前城内の雅楽など公の場での音楽を弘前藩庁日記から明らかにする。

②弘前藩の公式資料も含め、関連すると思われる資料の悉皆調査により、芸能者集団など庶民の音・音楽の展開過程を明らかにする。

③弘前藩の平曲相伝となった楠美家の音楽に関する資料、および同家の人々による東京音楽学校邦楽調査掛での活動など、近代日本の音楽文化に与えた影響についても明らかにする。

④メソジスト派など近代初期に津軽地方に滞在した宣教師文書から、近代の音に関する資料を収集する。比較対象として青森県内で宣教を行ったハリストス正教会の音楽に関わる動向も把握する。

３．研究の方法

本研究は、音や音楽に関する徹底的な資料調査をその主眼とし、近世資料と近代資料の調査を同時進行で行った。

研究開始にあたっては、調査対象とするべき資料の選定から始めた。従来の弘前藩研究において音や音楽はほとんど扱われてこなかったことから、あらためて弘前藩にかかわる先行研究の検証を行った上で、近世を中心として、弘前市立弘前図書館、青森県史編纂室所蔵資料から、本研究に必要となる文献資料調査を行った。具体的には、寛政年間および天保年間の日記から「楽」など、いくつ かのキーワードを設定して弘前藩日記を悉皆精査した。さらに目録を手がかりとして、藩日記以外の所蔵資料の調査も行い、民衆の音に関連する行動を表す資料も発掘・収集した。

また、近代については、弘前に滞在していたキリスト教メソジスト派の女性宣教師による年次報告書(Minutes of the Women's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan, 1886-1891)を中心に、音楽に関わる記述を手がかりとして調査を行った。以上の他、東京芸術大学所蔵資料など、楠美家の活動に関わる近代資料の調査および収集に務めた。

４．研究成果

近世弘前藩については、弘前市立弘前図書館所蔵資料のうち、音や音楽に関係する資料を精査し、楽譜など、奏楽にかかわる資料を見いだした。特に「奏楽御用留」は、他に類を見ないほど詳細に奏楽状況が記されたもので、当時の演奏習慣、演奏方法や演奏時間も含め、雅楽の音楽面に関する非常に多くの事実を知ることが出来る資料となっている。さらにこの中に記載されている奏楽の動向は、幕末期の弘前藩における「楽」思想に関する意識や様態を解明する手掛かりになるものであると同時に、弘前藩の範囲にとどまらず全国的な範囲でみても大変重要な史料である。

また、弘前藩庁日記の精査では、天明期・寛政期を中心に内容の分析を行った。藩政における「音」および「楽」とのつながりの一側面として、藩主の日常のなかに組み込まれた儀礼、また儀礼の種類とそれを執り行う場所の関係、またそれらを遂行するための顔ぶれに着目し、それらに関わる表現をピックアップした。

さらに天保期の弘前藩校における奏楽記録を見出した。藩校稽古館蔵書目録の和算関係資料にも関連資料の混在を確認した。この資料は、目録やタイトルに「音」や「楽」の表記がないものの、実質的に「楽」の実態を伝える資料であることから、和算関係の資料に「楽」に関連するものも含まれる可能性を示唆する存在として貴重である。藩学校における雅楽教習は、これまでのところ他の地域ではそれほど例が確認されてないことから、弘前藩独特の取り組みである可能性が注目される。

武士階級だけではなく、民衆の動向に関しても、幕末の在郷商人金木屋の日記から歌舞伎などの芸能集団とその受容の様子を明らかにし、民俗儀礼のなかの「音」の意味を報告した。

以上の他、本研究の次への展開の糸口として、弘前藩との対比となる盛岡藩（現在の青森県の東半分を領した）における動向にも着目した。地方知行制をとる盛岡藩では、知行地における支配層としての給人＝藩士が、知行地である村において、「音」や「楽」に関わる側面でどのような役割を任じ、影響をもたらしたかを明らかにする必要がある。その視点から地方給人層の残した史料の洗い直しに着手した。たとえば仙

台藩における地方給人の記録に、支配農民の子弟らに、謡を教授したこと、またその謡のテキストを支配農民の子弟らが、地方給人の家に来て書き写していたことなどが描かれていることから、こうした関係性の中で、村における「音」や「楽」に対する関心や素養が醸成されていった可能性は盛岡藩でもあり得たと考えられ、今後この分野での調査を進めたいと考えている。

近代についてはメソジスト派宣教師文書から音楽関係記事部分の抽出、および東京音楽学校草創期の記録から弘前藩士族関係資料の収集・解読を進めた。特に邦楽調査に関わる館山漸之進の資料は、弘前藩以来の音に関わる意識を窺わせる点で貴重である。

また、近世と同様に比較対象として盛岡藩領域の近代資料も調査を行った。明治初期にハリストス正教会を受容した北東北太平洋岸においては、正教会の聖歌を会堂ごとに歌えるようにするため、聖歌の教師の派遣が要請された。ハリストス正教会の聖歌は、明治初期の日本における西洋音楽流入の窓口の一つであり、北東北においても、聖歌の教師が待ち望まれたこと自体が、当該時期の「音」や「楽」を取り巻く意識を考えるうえで見逃せない点である。これらの聖歌教師の足取りを、正教会の機関誌である『教会報知』により、ある程度の把握ができた。

以上のように、本研究期間では綿密な資料の悉皆調査を主眼としており、これまでのその存在を知られていなかった資料を発掘するなど、一定の成果をあげた。これらにより、藩学校での音文化の捉え方、民衆の民間行事と「鳴物停止」の関係、近代洋楽史で等閑視されてきたハリストスの影響など、興味深い視点について、論考を上梓した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①浪川健治、「松前藩の成立と北方社会」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 5　地球的世界の成立』（吉川弘文館）、査読有、2013、277-291
②浪川健治、一八世紀〈変容する地域と民衆移動〉－盛岡藩「宗門人別目録」をてがかりに－、歴史、査読有、120、2013、1-29
③浪川健治、豊穣をめぐる祈念と営為－経験知と創出される儀礼－、浪川健治・小島康敬編『近世日本の言説と「知」―地域社会の変容をめぐる思想と意識―』（清文堂）、査読有、2013、104-134
④山下須美礼、明治初期旧八戸藩領周辺地域における氏族の危機意識とその動向―ハリストス正教会との関連から―、浪川健治・小島康敬編『近世日本の言説と「知」―地域社会の変容をめぐる思想と意識―』（清文堂）、査読有、2013、289-315
⑤浪川健治、村落の形成と検地、青森市編『新青森市史 通史編 2 近世』（青森市）、査読有、2012、53-82、
⑥北原かな子、留学生とお雇い外国人、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 7　近代化する日本』（吉川弘文館）、査読有、2012、300-314
⑦山下須美礼、明治初期ハリストス正教会における仙台藩士族の西日本伝教、歴史人類、査読有、40、2012、1-22
⑧武内恵美子、史料紹介「奏楽御用留」（弘前図書館岩見文庫蔵）、弘前大学國史研究、査読有、131、2011、76-82
⑨浪川健治、幕末における芸能興行とその受容―弘前藩領をめぐる動向と娯楽享受―、歴史人類、査読有、39、2011、51-87
⑩浪川健治、近代移行期の民衆と地域移動、明治維新史学会編『講座　明治維新 2 幕末政治と社会変動』（有志舎）、査読有、2011、

51-84

〔学会発表〕（計 8 件）
①武内恵美子、藩校における楽ー弘前藩校を例として、国際日本文化研究センター共同研究会、2014.3.1、国際日本文化研究センター（京都府京都市）
②山下須美礼、ハリストスー北からのキリスト教文化とその変容、平成 25 年度筑波大学人文・文化学群シンポジウム「グローバル・ヒストリーとしての長期の 19 世紀ーグローバル化のなかの東アジア世界と日本の歴史的基盤ー」、2014.1.11、筑波大学（茨城県つくば市）
③武内恵美子、雅楽における教養と思想ー楽・釈奠を例に、秋田大学公開講座、2013.12.15、秋田大学（秋田県秋田市）
④武内恵美子、釈奠と楽、国際日本文化研究センター共同研究会、2013.12.6、国際日本文化研究センター（京都府京都市）
⑤武内恵美子、藩校における楽の実施と「楽家録」、国際日本文化研究センター共同研究会　徳川社会と日本の近代ー17～19 世紀における日本文化状況と国際環境、2013.2.16、国際日本文化研究センター（京都府京都市）
⑥北原かな子、弘前の洋学関連資料について、洋学史学会 2012 年度大会、2012.12.8、弘前市文化センター（青森県弘前市）
⑦北原かな子、津軽地方における洋学受容、第５回近世史サマーセミナー、ふじや旅館、2012.7.14-16（山形県上山市）
⑧浪川健治、18 世紀変容する地域と民衆移動ー盛岡藩宗門人別目録を手がかりにー、東北大学国史談話会、2012.6.9、東北大学（宮城県仙台市）

〔図書〕（計 2 件）
①北原かな子、他、青森市史編集委員会、新青森市史通史編第三巻近代、2014、707
②北原かな子、岩田書院、津軽の近代と外国人教師、2013、160

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
北原　かな子（KITAHARA, Kanako）
青森中央短期大学・その他部局等・教授
研究者番号：80405943

(2)研究分担者
浪川　健治（NAMIKAWA, Kenji）
筑波大学・人文社会科学研究科（系）・教授
研究者番号： 50312781

武内　恵美子（TAKENOUCHI, Emiko）
秋田大学・教育文化学部・准教授
研究者番号：30400518

山下　須美礼（YAMASHITA, Sumire）
筑波大学・人文社会科学研究科（系）・助教
研究者番号：90523267

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：